名古屋女子大学　紀要　**50**（人・社）　25～30　2004

「記憶補助」の適用と言語障害児のコミュニケーション環境

―どのようにコミュニケーションの世界を広げるのか―

平林あゆ子

A Study on the Application of "Memory Aids": AAC (Augmentative Alternative Communication) Strategies and the Environment of Communication for the Handicapped with Speech and Language Disorders

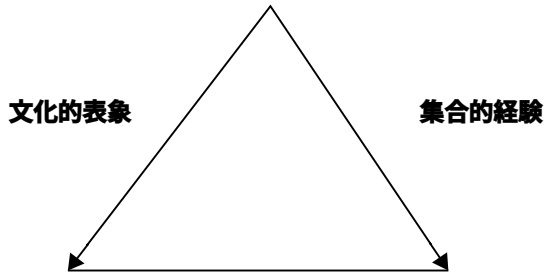
―How do we Broaden their World of Communication？―

Ayuko HIRABAYASHI

１．はじめに

コミュニケーション環境を整えるための方法に補助・代替コミュニケーション（AAC : Augmentative Alternative Communication）がある。コミュニケーションを促す方法としてAACは多方面で使用されるようになった。AACのアプローチは、「AAC手段」の表現でよく用いられ、コミュニケーションの有効な手段を追求し、機器の開発と研究に目が向けられているのが現状と思われる。AAC使用の言語治療臨床においては、コミュニケーション支援として手段を獲得し、イマ・ココの日常場面での要求などの引き出しや報告ばかりではなく、コミュニケーション障害をもつ人の経験世界を周りの人々に語ることのできるコミュニケーション環境の支援が、極めて重要かつ実際的な援助方法であると考える（平林，2003）b。

A.クラインマン（1988）は「個人的経験はローカルな世界である「集合的経験」やその時代や場のイメージである「文化的表象」との相互作用によって形作られる」と述べている。また、A.クラインマンによると「障害は単に個人的経験であるだけでなく、家族やネットワークのなかの個々人のあいだで経験されるものでもあり、さらに文化的イメージや行動の集合的パターンを反映するもの」となる。したがって、障害を持つ子の発話内容も、この三辺で囲まれた空間をもつものとして、三点測量する視点が必要である。A.クラインマンは物語（ストーリー）自体はつぎの図に示すような三角形の枠組みで分析することができると述べている。



A.クラインマン（1988）

この文化的表象や集合的経験がどのようなものであるか認識されるためにも、周囲の人に彼らの経験、自叙伝を語る機会が十分もたれることが重要と思われる。

しかし「語り－聴く」という日常の基本的な関係をもつことが重要にも関わらず、現代社会においてそれが極めて起こりにくい時代にある中で、障害を持つ子とのそのような関係をとることもさらに困難な時代といえよう。

障害を持つ子の障害は個別の児童のコミュニケーション障害として捉えられがちであるが、相互の関係の障害であり、場・環境の問題であるという視点がもっと強調されてもよいのではなかろうか。人と人は、お互いが影響しあっていて、一方が変わることにより、他方も変わるという、まるでお互いが鏡に映し出されているような、随伴的変化のある存在である。重度の障害をもつ人とその周囲の人との関係も同様である(平林，2003)ａ。その意味では、障害を持つ子の支援のみではなく、周囲の人の理解力を支援するという双方の視点で考える必要がある。

Burgeois，M.Sら(2001)は、世話をするスタッフと痴呆をもつ人とのコミュニケーション困難をコミュニケーション環境の不全として捉え、会話を促すための方略として「記憶補助」を使用して改善に導いた。「記憶補助」のメモリーブック、ワレット(小道具袋)やカードを外付けの記憶装置として補助的に使用して相互のやりとりのパターンを変容させ、情報の共有と親密さを高め、コミュニケーション環境の改善をみたと述べている。そこで筆者が関わる知的障害を伴う脳性まひ(以後CPと略記)をもつＫ児についても、コミュニケーション環境の支援として、「記憶補助」を使用して、他者の洞察や理解を深め、コミュニケーション環境の改善を図ることができると考えた。そして、Ｋ児の語りが促され地域の子ども達にも注目され理解されるように、「記憶補助」としてメモリーブックを作成指導し、自分の経験世界を周囲の人々に語る意義を検討した。

２．対象と方法

[対象児]

Ｋ児(男)：(在胎39週１日、2298gで出生、脳性まひ　痙直両麻痺、知的障害)

運動発達は寝返りまで、上肢下肢とも随意的なコントロール不可、(CA＝６：4，　言語発達：理解４：2，発語yes－noを「ハイ、アカン」で表現、不明瞭であるが、「ガッコウ」など聴き取れる単語がいくつかあり、主に硬口蓋音で代用しながら構音し、二語文をつくることもできる。)

[方法]

Ｋ児が地域の子どもに理解されるには、クラインマンのいう「文化的表象」としてＫ児の場のイメージである養護学校での生活や、「集合的経験」として地域のスーパーや学童クラブ(以後「学童」と略記)などでの生活の経験と「個人的経験」を盛り込んだ「記憶補助」を作成した。特に地域においてＫ児とのコミュニケーションを促すために題材に地域性を加味し、地域の人々の洞察力の高まりと親しみが出てくるように作成した。

「記憶補助」として主に写真を用いて各ページにタイトルとシンボルの付いた絵本の如きメモリーブック(図１)、自分の経験を連想させる小物をいれたワレット(小道具袋)の作成の方法や応用の仕方を養育者に教示した。またそのメモリーブックの内容に、音声も付加し電子化した機器(Meiden　Software　携帯用会話補助装置)も使用させた。メモリーブックの内容は、①自己紹介と養護学校での生活、②Ｋ児の障害について地域の子ども達が理解できるストーリー

と家庭での生活、③「学童」を含め近隣のスーパーでの経験など、地域性の入った自己の経験のストーリーである。

作成したメモリーブックは、まず筆者を相手に試行させ、写真の提示方法などを改善し、経験を整理して語る要領を得てから、家族など身近な人、地域で接触する人(「学童」で出会う人)、教育の場で接触する人、体験を共有しないが理解ある周囲の人々に徐々に応用していくことを試みた。月２回の言語指導場面でのビデオ分析、「学童」でのビデオ記録、養育者から試行経過の聴取、現場を見ることにより、子どもを取り囲む世界がどのように変化したかを平林(2003)ｃの７項目の「環境の調整を促す指標」により母親と共に検討した。

(写真＋シンボル＋文字
電子化したツールでは音声表示も可)

図１　メモリーブックの例

3．結　　果

K児のメモリーブック適用について、平林(2003)ｃの７項目の「環境の調整を促す指標」により検討した結果は以下のとおりである。主たる評価についての記述は、言語聴覚士の場合(ST)とし、母親の場合(M)と略記する。

「環境の調整を促す指標」によるメモリーブック適用の評価結果

評価者：　言語聴覚士(ST)　母親(M)

環境の調整を促す指標		評　価　結　果
1	本人にとって楽しいことか	・体験を写真に撮りストーリーをつくっていく過程で、喜びの表情と発声が多く喚起された(ST,M)。 ・メモリーブックをいろいろな人に見せ、コミュニケーションをとりたい様子がみられた(M)。
2	養育者がメモリーブックの使用を重要で意味あると考えるか	・母親自体に積極的な参加姿勢が見られ言語指導を楽しみにするようになった(ST)。 ・K児のコミュニケーション意欲をこれほど引き出し、周りの人も参加できるメモリーブックは大変有意義(M)。
3	周囲の人との関係をつくるきっかけを提供するか	・メモリーブックを媒介に自分自身のことを積極的に他人に知らせようと意欲的な態度がみられる(M)。 ・「学童」の子どもたちは、K児のメモリーブックのシンボルやメモリーブックの内容を電子化した機器に興味と関心をもち、K児の理解へのきっかけとなった(ST,M)。
4	様々な場面における周囲の人の理解や関与を引き出せるか	・メモリーブック使用を重ねるたびに、さらに周囲の人々はより広く深くK児を理解してきた。地域の「学童」で友だちの関係が育ってきている(M)。 ・K児に出会う子ども達はメモリーブックをきっかけにより具体的にK児を理解でき、子ども達の家庭で話題となり地域での対人関係の広がりが見られた(M)。
5	自己コントロールを促し、養育者から分離した自分を明確化する機会となり、自立を促進することに役立つか	・これまで、親を通してしかコミュニケーションをとろうとしなかったが、メモリーブックを媒介として、直接対話するようになった(M)。 ・メモリーブック開始前は、自らの表現ではなくて、母親の顔を見て、代わりに言わせるようにしていた(ST,M)。 ・母親の顔を見て確認することがなくなり、母親が媒体として居なくても、他者と相互のやりとりが促された(ST)。
6	コミュニケーション意欲を引き出し、発声発語や、その他の表現スキルの促しに役立つか	・メモリーブック使用の間、ずっと発声発語がみられる延いては他の子どもへ依頼することができた(ST, M)。 ・メモリーブックを視線と「出して」で要求したり、這い這いでメモリーブックの入っているかばんまで行き、取り出し語りたい態度を示す(M)。
7	地域の子どもと共通の体験の場がテーマとしてあげられ、親しみを感じるものを含んでいるか（例えば近隣のスーパー、公園など）	・地域の子供と共通の場と体験の語りを楽しめ、地域の子供にも興味と関心を引いている(学童クラブ等において)（M)。

４．考　　察

メモリーブックを使用して自分の経験世界を周囲に語ることにより、他者の洞察や理解を深め、コミュニケーション環境の改善を図ることを試みた。そして７項目の「環境の調整を促す指標」によりメモリーブックの適用について評価し、考察した。

１）目黒(1998)は、「自分史の口述」を麻痺性構音障害のある人の言語治療に取り入れ、聞き手が傾聴的態度で接することにより、患者は心理的支持が得られ、生存の意味と価値を自覚し自己同一性を確認できたと述べている。K児も何よりもメモリーブックを通して他者が自己の語りに興味をもってくれたことから「自分が語る価値のある生活の歴史をもつ自己」であることに気づき自信をもち、自尊感情にも繋がりエンパワメントを図れたと考えられる。

２）K児が言いたいことを伝える役割を他者と共有するメモリーブックが担うことにより、親が代理的に語るのではなく、よりK児に近いものとしてメモリーブックを媒介に直接対話するようになり、自立の促しとして有効であった。

３）メモリーブックの内容の一つであるK児の障害CPについての分かりやすいストーリーは、地域の子どもたちにK児の理解と受け容れやすさを作ったので、インテグレーションの際にはこのような配慮が重要と思われた。

４）メモリーブック作成過程への母親の参加も、子どもとの時間の流れを意味あるものとして語る機会となり母親の自信にも繋がり、ひいては言語聴覚士への道を探索し生きがい探しを始める機会となった。

５）共有する地域を意識したメモリーブックのテーマとシンボル、電子化しそれを自在に取り込んだ器機による音声や地域の中で経験したことの写真の提示は、地域に住む人の親しみを増し興味と関心を誘い、コミュニケーションのきっかけをつくる補助ツールとして有効であった。

６）Brady,N.C.（2000)は、２名の知的障害児にAACによる音声発信のツールVOCA(Voice Output of Communication Aid)を適用し、綿密なデータ分析により音声による呼称が促進されることを論じているが、K児もメモリーブック使用時に発声発語の増加がみられる。このことからもこのようなツールが音声言語の妨げになるのではなく促されるものと言えよう。

７）母親の印象によると、K児の指しゃぶり、噛み付きなど自分への注意ひきがメモリーブック使用を重ねることにより減少してきたと述べている。これはRemington(1994)の述べている「刺激等価性(stimulus equivalence)の理論に基づき、AAC手段を利用してより望ましいコミュニケーション反応を形成することで問題行動の軽減・消去をめざす」治療法略とも整合性を有している。このことからも他者の洞察や理解を深めるコミュニケーション環境の改善を目指したメモリーブックの適用は気持ちの安定や問題行動の軽減にも導くものと思われる。

８）地域でのノーマライゼーション、学校教育での分断を埋める移行ステップとして「学童」における障害児と健常児の関わる際のこの様な補助ツールの使用は、意味深いものとなる可能性がある。

以上が、今後の補助代替コミュニケーション(AAC)の言語治療臨床に求められる視点と、

重度のコミュニケーション障害をもつ人のコミュニケーション支援のあり様を再構築する上でいくばくかの寄与があることを願ってやまない。

文　献

Burgeois, M.S. et al., Memory Aids as Augmentative and Alternative Communication Strategy for Nursing Home Residents with Dementia. *Augmentative and Alternative Communication*. 17(３), 196－210(2001)

Brady, N.C. Improved comprehension of objects Names Following Voice Output Communication Aid Use : Two Case Studies . *Augmentative and Alternative Communication*, 16(３), 197－204(2000).

Kleinman, A. *The Illness Narratives*. A Division of Harper Collins Publishers. 1988.(江口重幸・五木田紳・上野豪志訳, 病の語り―慢性の病いをめぐる臨床人類学―, 誠信書房, 1996, p.4－５).

平林あゆ子ａ. 補助・代替コミュニケーション(AAC)とコミュニケーション障害―どのようにコミュニケーションの世界を広げるのか―. 名古屋女子大学紀要. 49, 人文・社会編. 67－78(2003).

平林あゆ子ｂ.「記憶補助」の指導とコミュニケーション環境(第一報). 第29回日本コミュニケーション障害学会学術講演会予稿集. 63(2003).

平林あゆ子ｃ.「こころのバリアフリーのために」―地域の子どもに障害理解を促すための支援―. 日本社会福祉学会第51回全国大会報告要旨集. 152(2003).

目黒文. 軽度麻痺性構音障害の：自分史の口述. 聴能言語学研究. 15(1,)29－30(1998).

Remington, B. Augumentative and alternative communication and behaviour analysis : A productive partnership? *Augumentative and Alternative Communication*, 10. 3－13(1994).

謝　辞

メモリーブックの例として写真を提供し掲載を快く認めてくださったご本人およびご家族と、お忙しい中を貴重なコメントをいただきました一橋大学湊博昭先生に、こころから深謝いたします。